

# テイル形の3つの性質（客観性、現象描写性、報告性）について<sup>(1)</sup>

～ル形との対比から～

谷口秀治

## 1. はじめに

動作の進行や結果の残存といった意味を表す、いわゆるテイル形(シテイル、シテイタ)については、現代日本語動詞におけるひとつの代表的なアスペクト形式として扱われ、従来より数多くの研究が試みられてきた。しかし、たとえば同じ現在進行中の動作を言い表す際にも、

- (1) a. 私はそう思う。
- b. 私はそう思っている。
- (2) a. よく降るなあ。
- b. よく降っているなあ。

のように、必ずしもテイル形ではなく、単純ル形(非テイル)によっても表現可能な場合もあり得るといえる。このような問題意識から、本稿では、アスペクトというカテゴリーとはまた別に、テイル形に本質的に備わっていると思われる3つの性質(客観性、現象描写性、報告性)について、主にル形と対比しながら考えてみたいと思う。

## 2. 客観性

テイル形に客観的な機能、性質が認められることは、すでに大江(1975)、国広(1982)などにみられるとおりであるが、これらは、主に人称制限に関する事実をその根拠としている。例えば、主観的な動詞「思う」は、

- (3) a. 私は、そう思うよ。
- b. \*彼は、そう思うよ。

のように人称制限を持っており、(3)b.のように話し手以外を主語に立てたい場合は、

- (4) 彼は、そう思っているよ。

と、テイル形にしなければならず、そこからテイル形に主観的な動詞を客観化する機能を認めたものである。これはすでによく知られる現象であるが、ここではもう一步踏み込み、

- (5) a. 私は、そう思うよ。
- b. 私は、そう思っているよ。

のように、一人称が主語に立って人称制限の問題がなくなり、ル形でもテイル形でも可能になった場合でもテイル形に客観性が認められるかどうかについて考えてみたい。

まず、このようなときでもテイル形に出来ない場合を考えてみよう。これには、まず、「つくづく」「ふと」のような主観性の強い修飾句がくる場合が考えられる。次の例をみてみよう。

(6) a. 私は、つくづくそう思うよ。

b. \*私は、つくづくそう思ってるよ。

(7) a. 私は、その時ふとそう思った。

b. \*私は、その時ふとそう思っていた。

このように、主観性の強い修飾句が来るとテイル形にはなりにくいことがわかる。このことは、次のように、「思う」以外の主観的な動詞においても同様である。

(8) a. 私は、つくづくそう感じるよ。

b. \*私は、つくづくそう感じてるよ。

(9) a. 私は、その時ふとそう感じた。

b. \*私は、その時ふとそう感じていた。

また、「絶対(に)」「なんといっても」のような主観的、断定的な修飾句も、

(10) a. おれ、絶対そう思うよ。

b. \*おれ、絶対そう思ってるよ。

(11) a. あたしゃ、なんといってもこれが一番だと思うよ。

b. \*あたしゃ、なんといってもこれが一番だと思ってるよ。

(12) a. 私は、誰が何と言おうと来年は阪神が優勝すると思うよ。

b. \*私は、誰が何と言おうと来年は阪神が優勝すると思ってるよ。

のように、テイル形とは共起しない。このように、テイル形は主観的な修飾句とは相容れない性質を持っているものと思われる。

さらに、感嘆文のように話し手の感覚をそのまま表出的に述べる場合にもテイル形では言いにくい。

(13) a. ああ、疲れた！

b. \*ああ、疲れてる！

(14) a. ああ、くたびれた！

b. \*ああ、くたびれてる！

(15) a. ああ、びっくりした！

b. \*ああ、びっくりしてる！

このような文も、やはり文全体として主観性を帯びた発話であると考えられる。そして、ここでもテイル形は使えないことがわかる。

以上、テイル形にならない場合をみた。次に、テイル形が積極的に用いられる場合を考えてみたい。これにはそれほどはっきりした条件は見当たらない。しかし、ある程度の傾向はみられるようである。以下、いくつかの例を検討してみよう。

(16) (北別府投手 200勝達成のテレビインタビューで)

「200 勝という数字についてはどのようにお考えですか？」

「私にとっては一つの通過点だと思っています。」

このような場合、もし下線部を「思います」とル形にすると、単に思いつきを述べているようで、慎重さに欠ける印象を与えるであろう。この場合はテイル形が自然であると思われる。また、次のように、内容的に深刻なこと、重みのあることを述べる場合をみても、

(17) a. 君には悪いことをしたと思っているよ。

b. ?君には悪いことをしたと思うよ。

(18) a. 先生は人生の先輩だと思っています。

b. ?先生は人生の先輩だと思います。

のように、ル形(b)では、慎重さ、誠実さに欠け、その場の思いつきで軽率に述べている感じを与える。このように、慎重な態度で述べる場合には、一般にテイル形が自然であると思われる。そして、この慎重な態度というのは、話し手が、述べようとしている内容をしっかり把握し、わきまえている、いいかえれば、そのことを客観的に述べようとするところから生まれるものと考えられる。

また、このほかテイル形になりやすい例として、話し手が自分についての情報を相手に伝える、といった場合が考えられる。例えば次のように、話し手が自分の予定に関して相手に尋ねられ、それに答える、といった場合である。

(19) 「広島にはいつまでいるの？」

a. 「この週末までは残ろうと思ってる。」

b. ? 「この週末までは残ろうと思う。」

(20) 「卒業したらどうするの？」

a. 「どこか旅行でもしようと思ってるよ。」

b. ? 「どこか旅行でもしようと思うよ。」

このような場合にもテイル形(a)が自然であろう。もしル形(b)にすると、相手に自分の予定を伝えているというよりは自分の主張を述べている感じになり、不自然な発話に聞こえるだろう。このような場合も、話し手がその事柄を、客観的な態度で言い表わすことが要求されている状況であると考えられる。そして、そのような場合にテイル形がふさわしいということも、テイル形のひとつの客観的性質の表われであると思われる。

このようにみても、「思う」のような主観的な動詞がテイル形をとった場合、主語が1人称であっても、客観的な性質は保たれているものと思われる。つまり、テイル形は、主語の人称に関係なく、主観的な動詞を客観的に表わす働きを持つものと考えられる。

以上、ここでは、主観的な意味を表わす動詞「思う」を中心に、従来から指摘されてきたことを少し発展させ、テイル形の客観性について検討した。

### 3. 現象描写性

まず、次の2つの文をみてみよう。

(21) a. うちの生徒はよく勉強しますよ。

b. うちの生徒はよく勉強してますよ。

このような文は、学校の先生が自分のクラスの生徒を評するような場合に聞かれ、a (ル形)、b (テイル形) とも一応自然な文と思われるが、両者の間には微妙なニュアンスの差が感じられる。まずaの方は、どちらかといえば「うちの生徒はよく勉強する生徒である」と、その生徒がどのような生徒かについて述べているのに対して、bの方は、「生徒が現によく勉強している」という具体的な現象について述べている感じである。同じような例をみてみよう。

(22) a. よく勉強するねえ、君は！

b. よく勉強してるねえ、君は！

この場合も、a、bともに、同じような場面、例えば、いま机に向かって熱心に勉強している人物(君)に対して話しかける、といった状況で発話可能であろう。しかし、その場合でも、a (ル形)の方はその人物について「君はよく勉強する人だ」という点に重きを置いて述べているのに対して、b (テイル形)では、その人物についてというよりも、その人物が勉強しているという場面に重きを置いて述べている感じである。次の例も同様である。

(23) a. 私はバツハよりブラームスにひかれる。

b. 私はバツハよりブラームスにひかれています。

この場合でも、aは「私はそのような人間である」という感じであるが、bはそれをひとつの現象として述べている感じである。このように、テイル形は、ル形に比べ、事実を具体的に、特定の場面の中で捉え、それをひとつの現象として描こうとする性質を持っていると考えられる。次のような文ではどうであろうか。

(24) a. この薬は頭痛にも効きますよ。

b. ?この薬は頭痛にも効いていますよ。

(25) a. 緑は目にいいって言うね。

b. ?緑は目にいいって言うてるね。

これらの例でも、a (ル形)の方は具体的な出来事というより、ものの属性や一般的な真理を表わしているものと思われる。このような場合にb (テイル形)にすると、奇妙に響いてしまう。文脈抜きで日本語話者が(24) b.のような文を耳にすれば、反射的に「過去にそういう例があるのか？」とってしまうであろうし、(25) b.のような文を聞けば、「誰がどこでそういうことを言ってるのだろうか？」と訝しがるであろう。このような場合にテイル形が不自然なのは、それが内容的にみて、極度に具体性に欠けるため、それをひとつ

の現象として捉え、言い表わすことが難しいからであると考えられる。もう少し例をみてもみよう。

(26) (NHK ラジオ講座で)

a. Que' hace Ud.? で「何をしていますか」という意味になります。

b. la cama は3人称ですから、esta' となっています。

上の文はaはル形、bはテイル形になっているが、これらは、次のようにそれぞれaをテイル形、bをル形に変えても自然な文である。

(27) a. Que' hace Ud.? で「何をしていますか」という意味になっています。

b. la cama は3人称ですから、esta' となります。

しかし、これらのa、bとも、ル形をとるか、テイル形をとるかによって何らかのニュアンスの差が感じられる。まず、ル形の場合(26)a.および(27)b.)をみると、ここでは、「そういう意味である」というひとつの公式、真理が話し手の中での判断にもとづいて述べられているのであり、従って、その発話に際して、テキストなどの補助的資料、視覚的手段は不要である。一方、テイル形の文(26)b.および(27)a.)では、事実は同じであっても、テキストなどの補助的資料、視覚的手段の介在を前提として述べられており、真理というよりは、ひとつの具体的、現実の現象として捉えられていると考えられる。

さらに、次の例を考えてみよう。

(28) a. シューベルトは1797年に生まれた。

b. シューベルトは1797年に生まれている。

(29) a. 被害者はそこで犯人に会ったんだ。

b. 被害者はそこで犯人に会ってるんだ。

このように同じ過去の事実を述べる場合、それぞれa(ル形)、b(テイル形)どちらの形でも可能であり、文脈を抜きして考えれば、どちらもごく自然な文である。ところが、次のように、何か具体的な資料などを参照しながら述べる場合は事情が変わり

(30) a. \*年表によれば、シューベルトは1797年に生まれた。

b. 年表によれば、シューベルトは1797年に生まれている。

(31) a. \*聞き込みによると、被害者はそこで犯人に会ったんだ。

b. 聞き込みによると、被害者はそこで犯人に会ってるんだ。

のように、テイル形のみが可能となる。このように、同じ事実であっても、テイル形は、出来事を具体的なひとつの現象として捉えて描き出そうとする一面を持っているものと考えられる。

以上、ここでは、テイル形の現象描写的な性質について考察した。

#### 4. 報告性

まず、冒頭に挙げた次の例をみてみよう。

(32) a. よく降るなあ。 (= (2) a.)

b. よく降っているなあ。 (= (2) b.)

上の a、b は、例えば、降り続く雨を窓越しに眺めながら独り言をつぶやく、といった場合に発話可能であろう。しかし、例えば、誰かに天気の様子を聞かれてそれに答える、といった場合には、事情は変わってくる。

(33) 「そっちの天気はどう？」

a. \* 「うん、よく降るよ。」

b. 「うん、よく降ってるよ。」

このような状況でル形(a)が用いられると、話し手は相手の質問に答えているというより、主張しているようで奇妙な感じを与える。このように、同じ出来事であっても、それを相手に伝える(報告する)といった場合には、テイル形(b)がふさわしいと考えられる。もう少し例をみてみよう。

(34) (留守番電話のメッセージで)

こちら中央図書館ですが、複写物が届いております。料金は 400円かかっております。取りにおいで下さい。

このような場合も、話し手は「料金が 400円かかった」という過去の事実を相手に伝えようとしている状況であるが、テイル形が使われている。それを仮に、次のようにシタ(ル形)で述べると、単に事実を事実として述べているに留まり、そのことを相手に伝えるという感じは薄れてしまうであろう。

(35)こちら中央図書館ですが、複写物が届いております。料金は 400円かかりました。

取りにおいで下さい。

このようにル形で言うと、事実を話し手の立場から直接的、表出的に述べることになってしまい、相手に伝える、という報告的な機能が十分発揮されないままに終わってしまう。このように、一般にテイル形はル形よりも報告的な機能においてすぐれているものと思われる。また、寺村(1984)においても、ル形で習慣を表わすものとして、

(36) a. 父は毎朝ジョギングをする。

b. 父はいつも 6時前に起きる。

といった例が挙げられているが、このような場合でも、次のような報告的な状況ではル形では難しくなる。

(37) 「お父さん、元気？」

a. 「うん、(父は) 毎朝ジョギングをしてるよ。」

b. \* 「うん、(父は) 毎朝ジョギングをするよ。」

(38) 「お父さん、調子はどう？」

a. 「うん、(父は) いつも 6時前に起きてるよ。」

b. \* 「うん、(父は) いつも 6時前に起きるよ。」

このように報告的な文においてはテイル形で言うのが自然である。これは、(37)(38)のように第三者(父親)のことに付いて述べる場合だけでなく、次のように話し手自身のことについて述べる場合でも同じである。

(39)「どう、調子は？」

a. 「うん、毎朝ジョギングをしてるよ。」

b. \* 「うん、毎朝ジョギングをするよ。」

このように、同じ現在の習慣を表わすのでも、報告の形で述べる場合にはテイル形が優先して用いられることがわかる。

次に、下のような対話をみてみよう。

(40)「論文の方はどうですか？」

a. 「それが、あまり進んでいません。」

b. 「それが、あまり進みません。」

これなども、話し手が相手の質問に答えて自分のことを述べようとしている場合である。ここでは、a(テイル形)、b(ル形)ともに可能であろう。しかし、ここでも微妙なニュアンスの違いが感じられる。まず、aの方は、話し手の問いかけに対して忠実に現状を報告している感じがするが、一方、bの方は、単に現状を述べるというだけでなく、悩んでいる、困っているといった、話し手の中での何らかの屈折した気持ちが含まれているものと思われる。aが報告的であるのに対して、bは表出的であるといってもよいであろう。このことは、上の例文の「あまり」の代わりに「どうしても」「なかなか」といった感情的な意味を含む副詞をあてはめてみても明らかである。

(41)「論文はどう？」

a. \* 「それが、どうしても／なかなか 進んでいません。」

b. 「それが、どうしても／なかなか 進みません。」

このようなテイル形の報告的な機能は、次のように、テレビニュースや新聞でスポーツ選手などの談話や表情を伝えるような場合にも顕著に表われる。

(42) (本場所で初優勝した水戸泉に関するテレビニュースで)

水戸泉は、銀杯につがれた酒を一気に飲み干し、優勝の美酒に酔いしれていました。

(43) (バルセロナ・オリンピックで銀メダルを取った有森選手のコーチの弁)

小出コーチも「次は駅伝。6人のメンバーに入れるようにスピードをつけないといけないよ」と早くもハッパをかけていた。(中国新聞、1992.8.3)

(44) (貴花田の20才の誕生日に関するテレビニュースで)

「二十代はもっと大事になる」と(貴花田は)気を引き締めていました。

(45) (中日郭投手の契約更改に関する記事で)

「一億円？まだチャンスはあるでしょう。今はひじの状態もいいし、来年は先発で10勝以上できるよう頑張る」と気持ちを切り替えていた。(読売新聞1992.12.9)

(46) (歌手ボブ・ディランのデビュー30周年記念コンサートに関する記事で)

コンサート会場には、中年の夫婦や家族連れが多く、自分たちの青春時代の思い出にひたっていた。(サンケイスポーツ1992.10.19)

このような例は、ふつう第三者についての表情や様子を伝える場合によくみられ、その意味でも典型的な報告文といえるであろう。これに対して、同じような状況でも、

(47) (高校野球のテレビニュースで)

初出場の砂川北は、甲子園で勝つことの難しさを思い知らされました。

(48) (バルセロナ・オリンピックで優勝したクリスティ選手の弁)

「みんな年齢のことを言うけど、何かを本当に達成しようと思ったら、遅いということはないんだ。」全世界の中年族に夢と希望を与えるセリフを吐いて、クリスティは、4年越しの公約実現に胸を張ってみせた。(毎日新聞1992.8.3)

のようにル形で表わされた場合は、話し手(書き手)自らが語っているという感じで、それを相手に伝えるという報告的機能は、上の(42)~(46)のテイル形の場合に比べ希薄であると考えられる。

以上、ここでは、テイル形の報告的な機能をみた。

## 5. おわりに

以上、本稿では、テイル形のもつ性質について、主にル形の場合と比較対照しながら、客観性、現象描写性、報告性といった点について考えてみた。ただし、これらの性質はテイル形というひとつの文法形式の姿を、いわば異なった角度から眺めたものであり、これらは互いにある部分において関連性、重複性を持つものといえる(したがって、例えば、「2. 客観性」の項のテイル形の例文において、現象描写性あるいは報告性といった性質が観察されても本論旨には何ら不都合が生じるものではない)。

そして、このようなテイル形の3つの性質は、いずれも、出来事をあくまでも客体化、対象化して捉えようとする話し手のクールな、あるいは一種の傍観者的態度に起因するものではないかと思われる。言い換えれば、テイル形が使われるためには、話し手と出来事との間に一定の心理的距離が存在することがそのひとつの条件であるとも考えられよう。

## 注

1 本稿は、1993年に提出した修士論文(谷口1993)をもとに、修正、加筆したものである。

## 主要参考文献

安藤貞雄(1986)『英語の論理・日本語の論理』大修館書店



- 大江三郎 (1975) 『日英語の比較研究—主観性をめぐって』 南雲堂
- 金水敏 (1989) 「『報告』についての覚書」 仁田義雄・益岡隆志 (編) (1989)
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」 金田一春彦 (編) 『日本語動詞のアスペクト』  
麦書房 (1976)
- 国広哲弥 (1982) 「人称の用法と構造」 『言語学演習 '82』 東京大学文学部言語学研究室
- 谷口秀治 (1993) 『テイル形とムードに関する一考察』 広島大学大学院教育学研究科修士  
論文
- 寺村秀夫 (1982) 「テンス・アスペクトのコト的側面とムード的側面」 『日本語学』 1-2  
\_\_\_\_\_ (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版
- 仁田義雄 (1989) 「現代日本語文のモダリティーの体系と構造」 仁田義雄・益岡隆志  
(編) 『日本語のモダリティー』 くろしお出版
- 藤井正 (1966) 「『動詞+ている』の意味」 金田一春彦 (編) (1976)
- 吉川武時 (1973) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」 金田一春彦 (編) (1976)